

CALLにおける授業デザインと評価

Conception et mise en œuvre de matériel d'ALAO et son évaluation

I W A N E Hisashi MORI Tomoko
岩根 久・森 朋子

大阪大学 Université d'Osaka・関西大学 Université de Kansai
iwane?lang.osaka-u.ac.jp, mori.tomoko?gmail.com

1. はじめに

必修選択のフランス語授業において、学生により多くの〈学び〉を与えるにはどのようにしたらよいのか。フランス語教育研究で様々な取り組みがなされる中、本研究では協調学習を取り入れた試みとその効果について報告するとともに、さらに〈授業デザイン〉の観点から、授業実践者である教員と授業評価研究者が協働して一つの授業デザインを構築する意義についても論じる。

2. 実践者と研究者、協働する

授業研究はこれまで主にアクションリサーチが主流である。90年代より教育学を始めとする多くの教員が、〈単に教えるだけ〉ではなく、より効果的に教授するための方法を模索した。これが教授法研究の発展につながった。やがて教授法を用いるだけでなく、教師自身が自らの教授法の影響を調べる〈Teacher as Researcher〉が現れる。これがアクションリサーチである。この授業研究の特徴は、教師が自らの授業を一步引いて客観視し、学生の影響を調べるものである。しかし学習者と教師の関係が徐々に変化し、学習者は教師が知識を送りこむ真っ白なキャンパスではなく、意思や感情を持った能動体であると認識が新たになった近年においては〈Teacher with Researcher〉という方法が生み出された。学習とは個人の発達ではなく、周りとの相互作用によってその関係性そのものが発達していくという考え方である¹。この考え方に基づけば、教師自身もあくまでも授業環境の関係性の中に存在する一つのソースであり、授業という共同体の一部である。こうなると自らの授業を客観的に観察するという事は難しい。そのために専門的に授業を調査し、改善のためのアドバイスを行う研究者が出現する。

¹ 状況論や関係発達論などがこれに含まれる。

3. 調査する

研究対象となった授業は、大阪大学共通教育科目フランス語 310A（選択必修で主に読解を中心とする）の2年生、2006年度前期のクラスであり、学生数は30名程度である。担当教員の岩根は必修という外発的な学習への動機づけを内発的に転化させる試みとして、通常のテキストの読解に加えて、CALLの特性を生かした〈朗読パフォーマンス〉を導入した。このような新しい試みが学生に及ぼす影響を、岩根自身が授業を実践しながら的確に評価することは難しい。そのため、授業評価研究を専門とする森を研究協力者として授業に参加させることによって、間接的なアクションリサーチを試みた。

この授業デザインの試みを評価するデータとして、森が4月から前期終了の7月末まで毎授業記入したフィールドノート、学期末に行った授業アンケート、また調査協力してくれた学生とのフォローアップメールインタビューを採用する。これらの内容を解釈的アプローチで質的に分析し、教師が整えた授業デザインが学生にどのように反映されているかについて考察を行う。また調査によって現状の影響を把握するのみならず、そこで得た知見をもとに授業改善のためのニーズ分析を行い、次年度により洗練された授業デザインへの示唆を得ることを目的とする。

4. 学びの環境をデザインする

授業のデザインとは、主に3つの要素で成り立っていると考えられる。まず第1に授業環境デザイン、第2にインストラクショナルデザイン（以下、IDと省略）、そして第3にそれらのデザインの効果を検証する評価研究である。以下、簡略的にまとめる。

4.1 授業環境デザイン

授業環境デザインとは、まさに関係論的、状況論的授業観に基づく概念であると言える。フランス語授業といっても対象授業が学校教育内なのか、必修なのか、どのような背景を持つ学習者なのか、さらにどのような教師なのかなど、様々な条件があり、ひとつとして同じ授業はないと言っても過言ではない。これらの条件に加えてその授業の目的や教室の環境などのすべての要素を加味し、その授業に一番適した授業環境を設定するのがこのデザインの役目である。著者らは、対象授業をフランス語を習得する場としてだけでなく、教養教育の一旦を担う初年次教育²の場としてもデザインすることを試みた。そして教育的効果が高い協調学習を授業環境デザインとして採用した。

複数の学習者が相互的に学び合う協調学習は、90年代から教育学をはじめとする多くの分野で研究され、学習動機付けや相互関係の調整能力、学習の能動性、メタ認知能力の育成などがその効果として報告されてきた（Lave, J. & Wenger, E. 1991, Brown & Palincsar, 1991, 佐伯 1998, ジョンソン/ジョンソン/スミス 2001）。

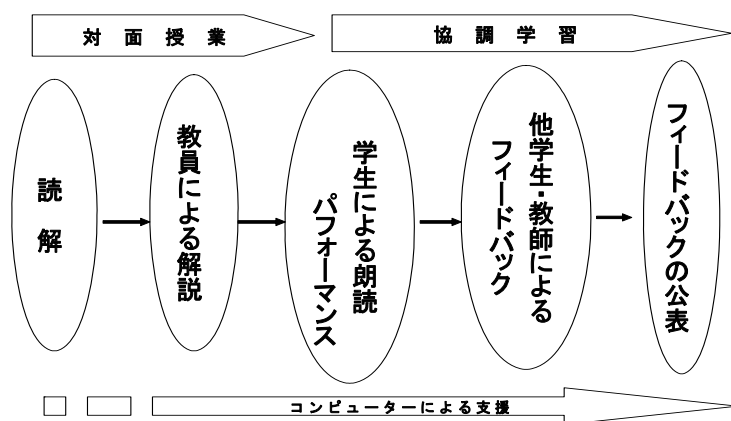
² 初年次教育が持つ大きな役割は転換教育である。それは中等教育と高等教育には大きな差異があるという認識の上で、学習観、知識観を含む様々なその個人の人間性に関わる価値観を転換させることを意味する教育である。

協調学習がもたらすこれらの効果は、これまでの大学受験を視野に入れた個人学習では多く欠落していた部分であることから、とくに大学の初年次教育での教育的効果が大きいと考えられる。さらに本研究では、協調学習の上記の効果を 30 名という大人数クラスでも実現させるために、コンピューターによる支援を行う。これは実践者の岩根がCALLに詳しい知識を持っていること、また大阪大学のCALL教室設備³が整っていることなどを考えても適切であると考えられる。コンピューター支援は、教師と学生をつなぐのみならず、この授業に参加する学生同士をつなぎ、大きなクラスダイナミクスを作ることも可能である。このような親和的動機から内発的な学習への動機付けが高まると考えられる。

4.2 インストラクショナルデザイン

4.1 の授業環境デザイン研究が個々の授業のそれぞれの条件を加味したケーススタディーであり、学習者が〈学ぶ〉環境をデザインするのであれば、IDは、実際に教師が〈教授する〉その内容をデザインすると言えよう。IDはこれまで主流であった教授法研究と深く結びついており、学習とは、スキルや能力の向上であるとする授業観に基づいている。言い換えれば「実際、何をすればいいのか」という現場の教師の切実なるニーズに応えるものであり、ケーススタディーでありながらマニュアル化できる部分が多い。今回はIDモデルの中でもADDIEモデル⁴を採用した。ADDIEモデルとは分析→設計→開発→実施→評価の 5 要素からなる教授システムである。この中でも設計について報告する。

読解の授業では概ね、学生が訳し教師が解説するというスタイルが多く取られている。岩根は 2006 年度、これに朗読パフォーマンスを組み込む。朗読パフォーマンスとは、①学生がフランス語の詩をクラスメイトの前で朗読する、②クラスメイトは朗読を聴いた感想を HP 上に書き込み、それが即座に公開されるという、パフォーマンスと評価活動を組み合わせたプロジェクト型学習である。狙いは、学習における他者の存在の重要性を再認識させることにより、メタ認知能力の中でもモニタリング能力の育成を促し、社会的動機によって学習を動機づけることにある。90 分 3 回分の授業を 1 サイクルとして、右の図 1 のような設計を行った。



この設計のポイントは、協調学習を全面的に取り入れるのではなく、これまで通常の対面授業を行っていた岩根に負担が少なく、且つ学

³ 詳細は <http://www.cmc.osaka-u.ac.jp/j/call/index.html> 参照 (最終アクセス 2007/05/13)。

⁴ ADDIE とは、Analyses, Design, Development, Implementation, Evaluation の頭文字を集めた造語である。

生に新しい学びを提供できる分割授業にしたことである。一つの課題の中で、対面授業と協調学習を抱き合わせて組み込むことで、学生の多面的な理解に結びつくと考えられる。さらに他者のパフォーマンスを評価するには自らが同等の能力を持つ必要があり、学生は「自分が当たらない時間」も授業に集中せざるを得ない。またHP上に書き入れたコメントが即座に記名式で公開されるため、学生自身に授業という共同体の一構成者としての責任が発生する。そこには他者の目があり、学習の社会性が担保される。この活動を岩根は他の学生と同じ方法でパフォーマンスに対して評価を行う。前半の対面授業で学生に示した〈知識ある者〉特有の権力を、この協調学習における評価活動において自ら立場を変化させていることになる。

他者をモニタリングするためには、他者と比べて自分自身を振り返る行為でもあるのだ。また評価するということは批判に直接的に結びつかない。〈さらなる改善へのアドバイス〉であると位置づけ、教師からのみではなく、学生同士が切磋琢磨する行為が評価活動と言える。

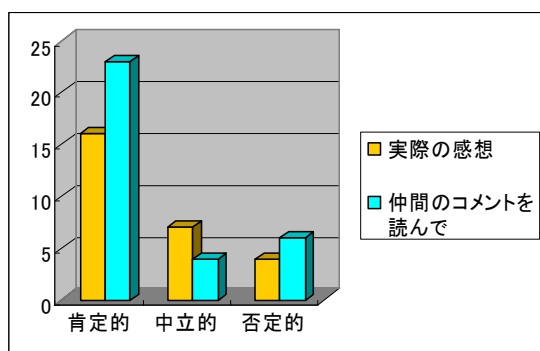
実際にこのような学習活動を学生はどのように受け止めていたのだろうか。

4.3 評価すること

本研究では評価という言葉は2つの意味合いで用いられている。第1はIDに組み込まれた学生が行う評価活動であり、これはモニタリング能力の育成や学習への動機付けを目的としている。第2はこの授業デザインが学生にどのような影響を与えたのかを調査する評価研究である。ここでは学生の評価活動の試みがどのような結果をもたらしたのか、調査した結果を述べる。

まず実際にパフォーマンスをした感想では、7割強の学生が肯定的な意見を述べている。「CALL ならではのコミュニケーション」「楽しい」「やる気がでた」(授業アンケートからの抜粋)などの意見が寄せられ、特に「新鮮な体験」「非常によい経験」では高等教育としてこれまでになかった新しい学習観を提示できたと考える。否定的な意見は1割程度で「恥ずかしい」「朗読をする意味がわからない」というものであった。次に実際にパフォーマンスをし、他者から評価された学生の感想である。肯定的な意見はさらに増え、8割以上を示している。第1の質問である実際にパフォーマンスをした感想と、クラスメイトからコメントをもらった感想を並列して表2に記す。

〈表2〉



ここで注目したいのは、肯定的な意見が他者から評価されることで大幅に増えている点である。他者の前で朗読をするという学習活動がすでに学生の肯定的な学習体験に結びついていると言えるが、その活動をさらに発展させ、学生同士に評価活動をさせる意義がここに現れている。朗読を体験したコメントと比較すれば、中立的な意見が減り、その分、肯定的な意見と否定的な意見が増えている。肯定的な意見の内

見が減り、その分、肯定的な意見と否定的な意見が増えている。肯定的な意見の内

容は「自分が気づかないところを指摘された」や「客観的にわかってよかった」というモニタリング能力そのものの意義を挙げるものもあったが、最も多かった意見は「褒められて嬉しかった」というものであった。この結果は、評価活動の影響は、当初IDが目的としていたモニタリング能力の育成効果より、学習への動機付け効果の方がより高かったことを示している。否定的な意見も増えているが、その内容は「同じことしか書いていない」「当たり障りのない意見」「参考にならない」など、評価活動そのものではなく、評価の内容に関する意見がほとんどであった⁵。

この否定的な意見が指摘しているように、学生は〈評価〉をどのように認識しているのだろうか。コメントに心がけていることは何かという質問に関して、褒める派が12名、批判派が11名、自然に任せる派とその他が5名という結果になった。褒めるコメントを通じて楽手の動機付けが強まるのは事実である。反対に自己の学習を振り返るモニタリング能力の育成は批判的指摘によってのみ達成され、否定的な意見を緩和することができる。授業実践者として長年の経験がある岩根はこれまでの知見により、人間関係ができてないところでの批判的評価は反対に学習への動機付けの低下につながるという指摘もしており、来年度の新しい授業デザインにどのように組み込むかが今後の課題の一つとなっている。

5. まとめ

「学生がどのように受け止めているのだろう」ということに、無関心な教師はいない。ただそのことに割ける時間と余裕が圧倒的に足りないのだ。そのような教師を支え、協働してより良い授業デザイン構築を目指すのが授業研究者、授業デザイナーである。学生が学生生活の中でフランス語学習に割く時間はあまりにも少ない。そう考えると、たった週1～2回の授業で、フランス語学習の芽を撒かなくてはならないことになる。学生のより豊かな学びのために、このような地道な授業改善研究は今や不可欠であるのだ。先行研究を常に追い、プランニングを行い、それが学生にどのような影響を及ぼしているか調査を通じてモニタリングする。さらに問題点を明らかにした上、改善へと向けてコントロールを試みる。このような教師側が行う自らの授業に関するメタ認知活動は循環評価とも言える。このように〈学習すること〉がメタ認知活動の積み重ねであるならば、〈教えること〉も授業環境内での様々な仕掛けに関するメタ認知活動を積み重ねなければならない。それには循環的なアクションリサーチが不可欠である。現場の教師は今やひとりぼっちではない。授業実践も授業研究も他者と協調し、効果的にアクションリサーチを続けることは、現場と理論を結ぶ包括的な外国語教育研究なのである。

⁵ クラスメイトに評価されること自体に「抵抗感がある」と答えた学生は一名であった。